

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720025

研究課題名(和文) 初期仏典伝承史の研究：パーリ經典の様式分析と北伝資料との比較に基づいて

研究課題名(英文) A Comparative Study on Pali Scriptures and Northern Buddhist Materials

研究代表者

馬場 紀寿 (BABA, Norihisa)

東京大学・東洋文化研究所・准教授

研究者番号：40431829

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：パーリ仏典と北伝資料との比較研究を進める過程で、南アジア・東南アジアでサンスクリット語が普遍語としての地位を確立していた4世紀から13世紀、インド本土の仏典がサンスクリット化され、またサンスクリットで編纂されたのに対し、なぜスリランカの上座部大寺派が伝承した仏典はパーリ語で伝承されたのか、その理由の一つを明らかにした。その研究成果は(1)スリランカから東アジアへ渡ったサンスクリット大乘經典、(2)上座部大寺派のパーリ語主義、(3)パーリ仏典圏の形成に关する論文として発表した。

研究成果の概要(英文)：The project elucidates one of the primary reasons why Buddhist scriptures belonging to the Mahavihara school in Sri Lanka were transmitted in Pali while in continental India (in the age of the "Sanskrit Cosmopolis") many Buddhist scriptures were written or rewritten in Sanskrit. On this topic, I have published three articles entitled (1) "A Short History of a Sanskrit Buddhist Scripture from Sri Lanka to East Asia," (2) "Language Ideology of Pali," and (3) "The Development of a Pali Literary Culture: From Sri Lanka to Continental Southeast Asia."

研究分野：仏教学

キーワード：サンスクリット パーリ語 上座部 大寺派 宝篋印經 パーリ仏典圏 パーリ語主義

1. 研究開始当初の背景

初期仏教を知るための資料集成として、パーリ仏典(律と五ニカーヤ)と漢訳仏典(諸律と四阿含等の諸経)断片的な資料として、ガンダーラ写本、サンスクリット写本、チベット訳文献が挙げられる。これらの諸資料を踏まえた初期仏典の伝承史的な研究は十分になされてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、初期仏典として分類される文献群、特にパーリ仏典の伝承史的研究を目指す。

3. 研究の方法

律典とともに伝承された四ニカーヤと韻文經典群という伝承系統が並存したという新たな視点からパーリ經典の様式(定型文や定式化された構成)を分析し、その成果を北伝資料(サンスクリット写本、ガンダーラ語写本、漢訳、チベット訳)と照らし合わせる作業を進めた。

4. 研究成果

パーリ仏典と北伝資料との比較研究を進める過程で、南アジア・東南アジアでサンスクリット語が普遍語としての地位を確立していた4世紀から13世紀、インド本土の仏典がサンスクリット化され、またサンスクリットで編纂されたのに対し、なぜスリランカの上座部大寺派が伝承した仏典はパーリ語で伝承されたのか、その理由の一つを明らかにした。その研究成果として、(1)スリランカから東アジアへ渡ったサンスクリット大乘經典、(2)上座部大寺派のパーリ語主義、(3)パーリ仏典圏の形成にかんする論文を発表した。それぞれの内容は、以下のようにまとめられる。

(1)

スリランカと中国との交易ルートによって中国へもたらされ、東アジアの文化に多

大な影響を与えた經典の一つが、本稿で取り上げる陀羅尼經として、**Sarvatathāgatādhiṣṭhānaḥṛdayaguhyadhātukaraṇḍamudra-nāma-dhāraṇī-sūtra* が挙げられる(以下、『宝篋印經』)。この經典は、仏塔や仏像へ本經の陀羅尼を納入すれば、その仏塔や仏像を礼拝供養した者は無量の功德を受けると説くために、東アジア各国にさまざまな文化的影響を与えてきた。従来の研究ではスリランカ・中国・日本という国別に分かれ、また、仏教・印刷史・美術史といった領域別に分かれて論じられてきた『宝篋印經』について、本稿では、スリランカ、中国、日本の諸資料を総合的に用いることによって、テキストがスリランカから中国へもたらされ、東アジアの仏教文化に影響を与えた過程を俯瞰し、新たに三つの仮説を提示した。

仏塔へ納入する陀羅尼を説く点で縁起法頌にはじまる法舍利の系譜に連なる『宝篋印經』は、八世紀に、大乘が繁栄していたスリランカから中国へ不空によりもたらされて漢訳された可能性が高いことを明らかにした。十世紀に、呉越の第五代国王、錢弘淑は、永明延寿の発案により、アショーカ王の八万四千塔建立、小塔供養、『宝篋印經』の納入という三つの要素を結び付けて、八万四千の小塔を作成し、その中に印刷した『宝篋印經』を納入したと考えられる。日本でも『宝篋印經』は平安末期から鎌倉時代に流行し、錢弘俣の影響の下、後白河法皇や源頼朝等によって『宝篋印經』を小塔へ納入した八万四千塔供養が行われたのに前後して、重源や運慶・快慶ら慶派の仏師たちは『宝篋印經』のB本、梵字・漢字の宝篋印陀羅尼を積極的に仏像へ納入し、それが次第に慶派以外にも普及していったという経緯が認められる。

不空によって『宝篋印經』がスリランカから中国へもたらされたこと、永明延寿が

銭弘淑塔の建立に関わっていたこと、重源や慶派の仏師たちが本經のB本を仏像の胎内に収めた経緯を明らかにしたことは本稿の新たな成果である。

(2)

上座部大寺派が「マガダ語」と呼ぶ言語、パーリ語にかんする大寺派の教説は、たびたび先行研究で取り上げられてきたが、いずれも基本的な内容の紹介が中心であり、この教説の歴史は、ほとんど明らかにされてこなかった。しかし、その後代への影響は極めて大きく、大寺派がサンスクリット経典を受容した無畏山寺派や祇多林寺派とは異なる道を歩んだ経緯と深く関わっている。そこで、本稿では、パーリ語にかんする教説の概要をまとめた上で、その源泉資料と大寺派が独自に付け加えた要素を分析して教説の形成過程を明らかにし、その歴史的役割を考察した。

Peter Skilling は、特定の言語を一切衆生が本来話した言語だとする主張を「根本語イデオロギー (*mūlabhāsā ideology*)」と呼び、「そのような主張は仏教において大寺に、あるいはより正確には、ブッダゴーサに特有であるように見える (Such a claim appears to be unique in Buddhist tradition to the Mahāvihāra, or more accurately to Buddhaghosa)」と言明している。しかしながら、彼が「根本語イデオロギー」と呼ぶ主張は決して大寺派やブッダゴーサに限られたものではなく、ブッダゴーサが編纂作業をしていたのとほぼ同じ時期に、すでに説一切有部においても展開されていた。五世紀前半に漢訳された『阿毘曇毘婆沙論』には、アーリヤ語を一切衆生が本来話した言語だとする、ブッダゴーサとほぼ同様の主張が確認されるから、この主張がブッダゴーサの独創ではなく、インド本土から何らかの形で継承したことを本稿は証明した。

この発見により、以下の経緯が明らかになった。

グプタ朝で生まれたサンスクリット化の波が南アジアと東南アジアを覆いつつあった五世紀、スリランカの上座部大寺派は、インド本土の仏教から「アーリヤ語論」を継承しつつも、それを改変して「パーリ語主義」を打ち出したことを明らかにした。大寺派は、一切衆生が本来アーリヤ語を話すことができたという言説を説一切有部と共有する一方で、「根本語」を「マガダ語」すなわちパーリ語に限定して、仏説の伝承にふさわしいのはパーリ語のみであると独自に主張したのである。このパーリ語主義の高揚により、五世紀に大寺派は、もともとシーハラ語で伝承されていた註釈文献をパーリ語で編纂し直した。

(3)

「パーリ仏典圏」とは、古代インドの言語のひとつ、パーリ語の仏典を伝承する地域を指し、スリランカと東南アジア大陸部のミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアとその周辺 (ベトナム、中国雲南省やバングラディッシュの一部) に広まっている。パーリ仏典は、もともとスリランカに拠点を置いた上座部 (Theriya) という部派、その中でも大寺 (Mahāvihāra) の系統に連なる人々によって伝承されたものであり、その部派名にちなみ、近代になると、この地域の仏教を総称して上座部仏教 (Theravāda Buddhism) と呼ぶようになった。このパーリ仏典圏を漢訳仏典圏やチベット訳仏典圏と比較するなら、後二者と共通の特徴が見えてくる。パーリ仏典圏においては、インド・ヨーロッパ語族のシンハラ語 (スリランカ)、シナ・チベット語族のビルマ語 (ミャンマー)、タイ・カダイ語族のタイ語 (タイ) とラオ語 (ラオス)、オーストロアジア語族のカンボジア語 (カンボジア) など、

語族の異なる諸言語が広がっているが、いずれもパーリ語に由来する語彙や概念を大量に含んでいる。これは漢訳仏典圏やチベット訳仏典圏で各地の言語にそれぞれ漢訳仏典やチベット訳仏典の語彙や概念が多量に含まれることとよく共通している。

他方、パーリ仏典圏に固有の特徴も見出される。漢訳仏典圏やチベット訳仏典圏ではいずれもインドの仏典をそれぞれ翻訳したのに対し、パーリ仏典圏ではインドの仏典を原語のままに伝承し続けた。また、漢訳仏典圏とチベット訳仏典圏では、その成立以前に、その規模に匹敵する文化圏が存在していなかったのに対し、パーリ仏典圏は、数世紀にわたるサンスクリット文化の圧倒的影響力が衰退した後で、スリランカと東南アジア大陸部で形成された。こうしたパーリ仏典圏の特徴や成立過程には、パーリ仏典を伝承した上座部大寺派の思想が少なからず関わっている。その点を明らかにするために、本稿では、パーリ語というインド語がなぜどのようにスリランカから東南アジア大陸部へ普及したのかを考察し、パーリ仏典圏の形成を論じた。

インドから東南アジアへの最初の仏教伝播は、この地における「サンスクリット・コスモポリス (Sanskrit Cosmopolis)」と呼ばれる国際空間を背景として起こった。四世紀、北インドにおけるグプタ朝の成立にともない、同朝が公用語としたサンスクリット語が南アジアと東南アジアの両方で普遍語 (universal language) となったのである (こうした変化を「サンスクリット化 (Sanskritization)」という)。もちろんグプタ朝以前からサンスクリット語はあったが、それはヴェーダという聖典の言語として伝承されていたに過ぎず、サンスクリット語が知識人たちの共通語として本格的に用いられるようになったのは、グプタ朝以降のことなのである。四世紀以降、南アジアと

東南アジアでは、碑文や銘板として今も残る行政文書はサンスクリット語で刻まれるようになり、叙事詩やカーヴィヤといったサンスクリット文学作品が普及し、サンスクリット経典を伝承する大乘仏教とヒンドゥー教が広がったのである。この状況は十二世紀まで続いた。

仏教に焦点を絞るなら、紀元前後に編纂され始めた大乘経典はブラークリット (非サンスクリットの俗語) で書かれていたのだが、サンスクリット語に直されるようになり (このような書き換えも「サンスクリット化 (Sanskritization)」という) また、新たにサンスクリット語の大乘経典が作成されるようになった。サンスクリット聖典を伝承する大乘仏教とヒンドゥー教がサンスクリット・コスモポリスの二大宗教となったのである。

今日、大乘仏教がほぼ滅んでしまった東南アジアにおいても、この時期、大乘仏教は繁栄していた。インドネシアのジャワ島のポロブドゥール遺跡は、八、九世紀に、『金剛頂経』という密教経典に基づいて造られた寺院である。カンボジアのアンコール遺跡群の多くは、九世紀から十五世紀に渡ってクメール朝の下で作られていたヒンドゥー教、あるいは大乘仏教の寺院である。さらに、中世の東南アジアでは観音菩薩像が非常に多かったことが各地の遺跡から確認されている。中でも有名なのは、カンボジアのバイヨン寺院である。クメール朝の最盛期を築いた王、ジャヤヴァルマン七世によって、アンコールトムという古都の中央に建てられたバイヨン寺院には、四面に巨大な観音菩薩の顔が彫られた巨大な塔が数多く整然と並んでいる。

こうした例から明らかのように、サンスクリット語を普遍語とする国際都市、「サンスクリット・コスモポリス」が南アジアと東南アジアに出現した時期に、同地でサン

スクリット聖典を伝承する大乘仏教・ヒンドゥー教が広まったのである。

これに対して、五世紀以降、スリランカの上座部大寺派は、三蔵の構成と範囲を定義して、パーリ正典を確立し、仏説はパーリ語で伝承しなければならないというパーリ語主義を掲げた。その結果、当時サンスクリット・コスモポリスの下でスリランカに続々ともたらされていたサンスクリット経典を斥ける理論的役割を果たし、パーリ語は大寺派三蔵（仏説）の言語としての地位を守り続けた。十二世紀以降、スリランカから上座部大寺派が東南アジア大陸部に進出し、大乘仏教に代わって、パーリ語仏典圏を形成した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2件)

馬場紀寿、「上座部大寺派のパーリ語主義」『パーリ学仏教文化学』vol. 29, pp.34-54, 査読有、2015年。

馬場紀寿、

「『宝篋印経』の伝播と展開—スリランカの大乗と不空、延寿、重源、慶派—」

『仏教学』vol. 54, pp.1-21, 査読有、2013年。

〔学会発表〕(計 3件)

馬場紀寿、

「上座部大寺派のパーリ語主義」

パーリ学仏教文化学会、四天王寺大学（大阪府羽曳野市）2015年5月30日。

馬場紀寿、

「『宝篋印経』の伝播と展開—スリランカの大乗と不空、延寿、重源、慶派—」

仏教思想学会、国際仏教大学院大学（東京都文京区）2012年6月。

Norihisa Baba,

“The Making of the Chinese *Ekottarikama* 49.5,”

Seventh Biennial International Conference on Buddhist Texts: Critical Edition, Transliteration and Translation,” Somajya Vidyavihar, Mumbai, India, 2012年12月。

〔図書〕(計 2件)

羽田正（編）馬場紀寿（分担執筆）

「陀羅尼は海を越えて—スリランカの經典伝播と東アジアの仏教文化」、『グローバルヒストリーと東アジア史』

東京大学出版会、pp.133-156（総ページ数328ページ）2016年。

新川登亀男（編）馬場紀寿（分担執筆）

「パーリ仏典圏の形成—スリランカから東南アジアへ」、『仏教文明の転回と表現—文字・言語・造形と思想』勉誠出版、pp.3-23

（総ページ数 p.672）2015年。

〔産業財産権〕

出願状況（計 0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

馬場 紀寿 (BABA, Norihisa)
東京大学・東洋文化研究所・准教授
研究者番号：40431829

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：